

<研究報告>

ガーナの独立記念式典の変容過程の事例を中心として

阿久津昌三 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：ガーナ 独立記念式典 帝国の終焉 政権交代 ンクルマ銅像

1. ガーナの独立式典

ガーナの独立は1957年3月6日である。独立式典には、世界各国の著名人たちが出席した。ニクソン、キング牧師、ジャズ奏者のアームストロング夫人などが出席している。当時、アメリカの副大統領であったニクソンは「独立式典で私はそれを親しく見たが、座談では内気に見えるほどの話し方をする人が、演説を始めると、少ししゃべっただけで聴衆を興奮のるつぼに投げ入れた」と語っている(ニクソン, 1986, p. 293)。また、キング牧師は、「新しい国家の誕生」と題して、モントゴメリーの教会で「深夜零時、古いイギリスの国旗が降ろされて、新しいガーナの国旗が揚がっていった。ここは今や新しい国であった。新しい国が誕生しつつあったのである」(キング, 2003, p. 40)と説教をしている¹⁾。独立式典には、アダム・クレイトン・パウエル、A・フィリップ・ランドルフなどの公民権運動の闘士たち、ラルフ・バンチも列席している。

前夜の午後10時30分、クワメ・ンクルマはゴールドコースト最後の立法議会において施政演説を行い「今までわれわれを縛りつけてきた帝国主義と植民地主義の鎖は取り除かれた」と語っている。午前零時に英国旗のユニオン・ジャックが「葬送喇叭」とともに降ろされ、新しいガーナの国旗が掲揚された。国歌はイギリス労働党議員で法律家ヒューズ作(労働党員がインターナショナルの代わりに好んで歌う)「英国よ起て」の節そのままに「ガーナよ起て」が歌われた。翌日の午前、国民議会の施政演説が行なわれ「議会では議長席に近く端然と座を構え、ウェストミンスター閣僚そのこのけの水際立った弁舌で野党の攻勢をいなした」とジャン・モリスは書いている(モリス, 2010, p. 353)。

独立式典は、1947年のインド独立式典で採用された形式にならって、深夜零時きっかりに、最後のイギリスの国旗がケント公爵夫人の前で「葬送喇叭」にあわせて降ろされた。これは「帝国の終焉」を象徴するものであった。カズオ・イシグロの長編小説『日の名残り』(1989年)はまさに大英帝国の栄光が失せた伝統的な貴族文化の衰退を描いたものである。1956年の初夏に設定されている。

スーダン(1956年1月)、ガーナ(1957年3月)にナイジェリア(1960年10月)、シエラレオネ(1961年4月)にタンガニーカ(1961年12月)。そしてウガンダ(1962年12月)、ケニア(1963年12月)に、さらにニアサランド(1964年7月)に北ロー

デシア（1964年10月）と、デヴィッド・キャナダインは旧英領の植民地は「一つずつ自立していき、その名前の点呼は、帝国の死をつげる鐘のようであった」（キャナダイン 2004, p. 24）と語っている。

アフリカ諸国は、希望に満ちた前途を踏みだしたはずだった。だが独立以降、約60年の歳月を経て、順調に国づくりを進めている国もあれば、指導者の過ちのために国づくりに失敗している国もあれば、停滞の袋小路に入り込んでいる国もある。

2. 「真夜中の自由」の儀式

サルマン・ルシュディは、『真夜中の子供たち』のなかで、「私の生まれは（中略）ナルリカル医師の医院で1947年8月15日。時間は？ 時間も重要なのだ。えーと、それなら夜だ。いやもっと正確に-----えーと、実は真夜中かつきりだった。時間の針が恭しく合掌して私の誕生を迎えてくれたわけだ。ほう、もっとくわしく。つまり、まさにインドの独立達成の瞬間に、私は呱呱の声をあげたわけだ（この時がじっと待たれていたのだ）」と「真夜中の自由」(Freedoms at Midnight) を描写している（ルシュディ, 1989, p. 11）。インド独立の瞬間である。

また、キャナダインは、『虚飾の帝国』のなかで、「独立への歩み」を次のように記述している。

「帝国の終焉には、おおよそ以下の道をたどる一般的なパターンがあるのに気づくようになった。1950年代中葉から1960年代中葉までのある時期に、マラヤでの共産主義者の反乱、ケニアでのマウマウ闘争、キプロスでのゲリラ戦のように、植民地に『混乱』が生ずるようになった。すると直ちに、強硬なイギリス人総督は非常事態宣言を出し、民主主義指導者が逮捕、投獄された。やがて彼らが釈放されてすぐにその一人が植民地の初代首相となり、イギリスは独立へと迅速に向かわせるべく彼と交渉を開始した」（キャナダイン, 2004, p. 247）。

ガーナは典型的な事例である。アメリカに留学していたンクルマは1945年5月にイギリスに渡航。ロンドンのユーストン駅でジョージ・パドモアと待ち合わせる。C・L・R・ジェームズの紹介によるものであった。同年10月にマンチェスターで開催された第5回パン・アフリカ会議でデュボイス、ケニヤッタたちと参加し、それまでの自治要求を超えて独立の要求を打ち出した。1947年10月にはロンドンで『植民地解放に向けて』を脱稿している（Nkrumah, 1962）。同年12月、統一ゴールドコースト会議（以下、UGCCと略す）の書記長就任のために帰国した。

アクラ騒擾は1948年2月に起きている。3月、UGCCの幹部6人（ダンクァ、アコ・アジェイ、ウィリアム・オフォリ・アッタ、ンクルマ、オベツェビ・ラムプティ、アクフォ・アッド）²⁾（後に「ビッグ・シックス」とよばれる）が逮捕された。アクラ騒擾に続いて、マラヤでもマラヤ共産党を中心とする反英ゲリラ活動が活発となったため非常事態宣言が出され、権力闘争が続いた。植民地相はすべての植民地の総督及

び警視総監に対して警告を発している。各国の資料の機密解除にともなって、ンクルマがどのような行動をとったのかも、かなり詳細に明らかになっている。ガーナの独立にあたって「権力移譲」という概念をとりいれて新たな統治形態を生みだしている。アクラ騒擾で総督が解任され、新しい総督が任命され着任した。チャールズ・アーデン＝クラーク総督である。ここに、老巧の総督とンクルマという青年の指導者（ベランダ・ボーイ）との駆け引きが始まる。

アーデン＝クラークは、任期が終わり、帰国して、1957年11月21日に開催された王立アフリカ協会と王立帝国協会の連合会議において「ガーナの移行期8年」と題する講演を行なっている（Arden-Clarke, 1958）。この講演は、「権力移譲はイギリスの植民地政策の新しい概念となりうるか」「独立への道は早すぎたのではないか」という二つの問題について約40分にわたって行なわれたものである。アーデン＝クラークは、ンクルマとの出会いについて、次のように回顧している。

「ンクルマと私はそれまで会ったことはなかった。私たちは噂だけでお互いのことを知っていた。私の噂はかれにとって気に障るものであったと思う。かれの噂も私にとって気に障るものであった。私はかれを呼んだ。かれは同僚の幾人かとやって来た。私は政府をつくるためにかれを招いたのだった。その会議はお互いの疑心暗鬼と不信の匂いがぷんぷんとしていた。2頭の犬が初めて出会ったようなものだった。半ば毛を逆立ててお互いに鼻をすすり、噛みつくか、しっぽを振るかどうか決断しようとしている。そしてまもなくンクルマが私のところに独りでやってきた。私たちはお互いを知るようになった。毛を逆立てることもなくなった。終わる前にはしっぽを巻いていた」（Arden-Clarke, 1958, p. 33）。

アーデン＝クラークは、「アクラ騒擾はインドの基準からすればたいした問題ではない。ガーナの基準ではこれが問題だった」（Arden-Clarke, 1958, p. 30）と述懐している。前総督が、アクラ騒擾が発生してすぐに「非常事態」を宣言したのは間違いだったとばかりに非難しているようにもみえる。つまり、「ガーナの基準」に照らして火をつけたンクルマたちの戦略がうまく巧を奏したのである³⁾。「非常事態」の発表の2日後には、西アフリカ民族事務局（West African National Secretariat）のバンコーレ・アウーナ＝レンナーの指導のもとに、ロンドンでも約2千人の警察の監視のもとで、ダウニング街10番地にある首相公邸までデモ行進をして、クレメント・アトリー首相に決議文を提出している。

アクラ騒擾後に、ンクルマとダンクァとの間の亀裂は決定的なものになった。ンクルマがUGCCを脱党し、1949年6月に会議人民党（以下、CPPと略す）を結成した。アーデン＝クラーク総督が着任したのはその2か月後である。1951年2月に総選挙が行なわれた。選挙の結果、CPPの圧勝に終わった。獄中から立候補したンクルマも当選した。監獄の周りでは「ジョン・ブラウンの屍」の替え歌で、ンクルマの釈放を訴えるデモが繰り返された。アーデン＝クラークはンクルマを最終的に釈放するこ

とを決めた。アーデン＝クラークはンクルマに組閣を命じ、ンクルマは政府事務首班に指名された。また、新憲法のもとで1954年6月の総選挙においても圧勝した。ガーナの独立は規定路線のものとなった。

キャナダインは大英帝国のもとの「独立式典」を次のように記述している。

「世界中の独立式典では、1947年にマウントバッテンが初めて考案した形式にならって、最後にイギリス国旗が、帝国、ヒエラルキー、君主制の終焉を見守る王族の面前で引き降ろされた。新しく生まれた国ぐにでは、かつてのインドと同じく、総督の壮麗さ、総督代理、顧問官たち、羽毛の帽子、綬賞や勲章、国王像、エンパイア・デーはたちまち消滅し、西洋式の政党の中流意識の指導者にとって代わられた。新しい国民国家の大半がコモンウェルスに加盟したが、それによって、コモンウェルスはさらに変容した。新生国家は、インドの先例にならって共和国となり、近代性と平等への関与、ならびに、ヒエラルキーと伝統の拒絶を宣言した」(キャナダイン, 2004, p. 212)。

ガーナの独立式典の映像を見ると、アーデン＝クラーク総督の華麗なる衣装、ケント公爵夫人とダンスをするンクルマ、国旗の掲揚、国歌の斉唱、鼓笛隊と軍隊の行進、民族の踊り、ミス・コンテスト、競艇と競馬、アフリカに船で戻ってきた人々（まるで奴隷交易の逆ルート）(The Door of No Return)、ハイライフ音楽の演奏、戦没者の追悼、立法議会の閉幕と国民議会の開幕、花火の打ち上げなどの場面がみられる。これは「帝国の終焉」(帝国支配の手段かつ表現であった「装飾的な総督統治及び国内の社会的な階層序列」の終焉)を意味した。

3. ナショナルデイとインデペンデンスデイ

1960年は「アフリカの年」とよばれている。セネガル、マリ、コートジボワール、ブルキナファソ、ニジェール、ベニン、トーゴ、ナイジェリア、カメルーン、コンゴ、ガボン、チャド、中央アフリカ、ザイール、ソマリア、マダガスカル。これらの国々は2020年には独立60周年を迎えることになる。

ナショナルデイは国家の「過去」を想起し、再集団化(re-member)あるいは再演出(re-enact)、再提示(re-present)、または再定義(re-define)したりする。ナショナルデイは公衆や国際的な聴衆の参加を得て、国家に対する情緒的な愛着(ナショナリズム)を昂揚させる機能をはたしている。また、ナショナルデイは国民と国家との関係を具象化し、国家を記念するために独特な公的な祝祭性をともなって表現される。つまり、ナショナルデイは「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)を演出する儀式をとまなう。トランプ大統領がアメリカ独立記念日に軍事パレード、航空ショーを演出したように、これらの儀式には政権のイデオロギーが見え隠れしている(なお、ナショナルデイについては、McCrone and McPherson (2009), Elgeriues (2011)を参照されたい)。また、リチャード・ホランドほか編『インデペンデンスの図像学—「真夜中

ガーナの独立記念式典

の自由』には、インド、パキスタン、ガーナ、ガイアナ、ジンバブエ、フランス帝国、マラヤの事例が収録されている (Holland, 2013)。

ゼルバベルの調査では、ナショナルデイの 191 事例のうち、139 はインデペンデンスデイ、バースデイ (誕生日) であるという報告がある。つまり、ナショナルデイの 72.8% はインデペンデンスデイという結果になっている (Zerubavel, 2003)。しかしながら、アフリカ諸国—西アフリカ (ガーナ、ナイジェリア、リベリア)、東アフリカ (ケニア、ウガンダ、タンザニア)、中央アフリカ (ザンビア、コンゴ民主)、南部アフリカ (ボツワナ、ジンバブエ、南アフリカ) のナショナルデイを比較検討してみると、必ずしもナショナルデイはインデペンデンスデイとはかぎらない。ナショナルデイは集団、エスニシティ、ナショナル・アイデンティティとの関わりできわめて多義的 (一義的)、可変的 (不変的)、重層的 (単層的)、流動的 (固定的) であり、アフリカ諸国の政治変動のなかで分析されなければならない。ナショナルデイは強権的政治体制のなかで両極の軸を絶えず変動している。また、ガーナの独立記念式典は、現在、ロンドン、ベルリン、ニューヨーク、東京などのディアスポラにとって集団形成とナショナル・アイデンティティの「結衆」の原点となっている。

4. 独立 50 周年記念式典

カローラ・レントツ (ドイツのヨハン・グーテンベルグ大学人類学・アフリカ研究学部) は、5名の博士課程及び9名の修士課程の学生たちとともに独立 50 周年式典及びナミビアを対象に独立 20 周年式典の調査研究プロジェクトを実施している。具体的には、コートジボワール、ベニン、ブルキナファソ、カメルーン、ナイジェリア、コンゴ民主、ガボン、マリ、マダガスカル、ナミビアである (Lentz, 2011; Lentz, 2013a, p. 215)。これらの調査によると、独立 50 周年式典は国家主導・統制のもので実施されたものもあれば、民間主導で実施されたものもある。いずれにしても独立記念式典は地域や民族の集団形成に結びついており、ナショナル・アイデンティティを昂揚する機能をはたしている。

また、レントツは 2010 年に開催された 50 周年記念式典を主にとりあげ、インデペンデンスデイの政治学と美学についても探究している。ピエール・ノラの「記憶の場」 (ノラ, 2002) をモデルとして、記念式典を通して、ナショナル・ヒストリーがいかにかに記憶されたり回想されたりするのかを比較検討している。「博物館、文書館、基地、コレクション、祭典、記念日、条約、議事録、モニュメント、神殿、アソシアシオン、これらはみな過ぎ去りし時代の、永遠という幻想のしるべである」とはノラの言葉である (ノラ, 2002, p. 37)。具体的には、インデペンデンスデイとはいつなのか、また、レントツは、インデペンデンスの本当の意味は何なのか、さらに「国民的英雄」とは誰なのかを詳細に分析している (Lentz, 2013b)。

しかし、この論文が書かれた時には現役だった大統領たちも 50 周年記念式典等を最

後に、あるいはその前に政治的な舞台から消えていることに気づかされた。逆に言えば、独立記念式典は大統領のガバナンスを見るための試金石となることがわかる。はたして60周年記念式典を迎えることができる大統領はどのくらいいるのだろうか。

例えば、ブルキナファソでは2014年10月に事実上の軍事クーデタが発生しブレイズ・コンパオレ大統領が辞任を表明して27年間に及ぶ長期政権が幕を下ろした。この6週間後に開催されたナショナルデイの式典はきわめて興味深い事例である(Gabriel, 2016)。スーダンでもクーデタでバシール大統領が解任され、国際司法裁判所には出廷しなかったが地元の裁判所で係争中である。弁護団の数がものすごい。

ブルキナファソでは1960年の独立を記念して毎年12月11日にナショナルデイが開催されている。実際にオートヴォルタという国名で独立したのは1960年8月5日だったが、当時の政府はナショナルデイの開催を「雨季」を避けて「乾季」の12月11日に延期することを決めたのである。トーマス・サンカラが1983年8月4日にクーデタで権力を掌握すると、国名もブルキナファソに改名しただけではなく、革命を記念してこの日をナショナルデイと定めている。これはサンカラがブレイズ・コンパオレによって暗殺された1987年10月15日まで続けられた。コンパオレは8月4日をナショナルデイとしていたが、サンカラの死を悼む顕彰の日の色彩が強くなり、逆に、コンパオレは10月15日をナショナルデイにすると世論が割れることを危惧して、1992年に12月11日をナショナルデイに戻したのである。また、コンパオレは独立記念式典の開催を首都一極集中ではなく各都市の輪番で実施することを決めた。権力の分散を図った(Gabriel, 2016, pp. 26-27) (これはモシ王国の「遍歴する王朝の移動」と同じ構図である)。コンパオレは大統領選挙に1991年に選出され、1998年に再選、2005年に3選となった。3選までの規定であったが、さらに4選出馬するために憲法改正案を提出したが、反対デモが起こり、2014年10月30日に国軍による軍事クーデタが発生し、翌日に大統領辞任を表明。コンパオレは隣国のコートジボワールに亡命して長期政権は終止符を打った。6週間後に開催されたナショナルデイは「解放の日」の祝祭となった。

2007年3月6日にはガーナの独立50周年記念式典(以下、Ghana@50と略す)が各地で盛大に開催された。ビッグ・シックスの国民的英雄が祀りあげられた。ンクルマとダンクァとの対立関係があったC P PとU G C Cとの儀礼上の「統合」と「和解」と見ることができる。これはモニュメントや紙幣の発行などに象徴的にみられる。

また、ンクルマの政治的身体は、後述することになるが、亡命先のギニアのコナクリで埋葬され、ブシア政権の崩壊とともに生地のコフル村に戻され再埋葬、さらにアクラのポロ広場に再々埋葬された。ンクルマの名誉剥奪と名誉回復のドラマは遺体とその葬儀(また、銅像の処遇)にみることができる。なお、Ghana@50の式典の様相についてはCarola and Budniok (2007), Commander (2007), Akyeampong and Aikins (2008), Anyidoho and Asante (2008), Carola (2013c)などを参照されたい。また、

ガーナの独立 60 周年（以下、Ghana@60 と略す）にはクエギル・アグレイの記念紙幣が発行された。「白い鍵盤だけでも音は出せるし、黒い鍵盤でもある音は出せる。しかしハーモニーをつくるためには、黒と白の両方の鍵盤を使わなければならない」というアグレイの言葉はとても有名である。

5. 記憶と忘却の歴史

独立記念式典の変容過程は「政権交代の力学」と「モニュメント」という座標軸で見るとはっきりと理解することができる。これは、独立記念式典に見る「大統領のページメント」ともよぶべきものである。ヤン・アスマンは「忘却の最も簡潔で最も広まった技術は、碑文、図像、建築物など文化の客体物に外化された記憶を、破壊することである」と述べている（飯田，2018, p. 5）。筆者も、ガーナにおいて国旗・国歌・銅像・戦没者慰霊碑・議事堂・紙幣・貨幣・郵便切手等の象徴論・権力論的分析、指導者たちの銅像、博物館の展示及びストリートの名称等の都市構造と独立記念碑の地政学的分析を行なった（cf. Hess, 2006; Fuller, 2014）。ここでは紙幅の関係で「政権交代の力学」のなかで「モニュメント」に着目して「記憶と忘却の歴史」を見ておきたい。

1957 年 3 月 6 日にイギリスから独立をはたしンクルマが首相に就任したことはすでに述べた。1958 年 3 月の独立 1 周年記念にはンクルマ銅像の除幕式が行なわれた。この銅像は独立前に発注されていたものでイタリアの彫刻家ニコラ・キャタデーラの作品である（Hess, 2006, p. 30; Fuller, 2014, pp. 127, 129-131）。1960 年 7 月にガーナは「共和制」（republic）に移行しンクルマは大統領に就任した（第 1 共和制）。

1966 年 2 月にホーチミン大統領の招きでベトナムに向かったンクルマは、途上の北京で、本国のクーデタを知った。約 10 日後の 3 月 6 日には独立 9 周年記念式典が予定されていた。ンクルマの銅像が倒されて小さな子どもたちが遊んでいる写真は世界に広く報道された（Hess, 2006, p. 55; Meredith, 2005, plate 26; Kellner, 1987, p. 86）。

この銅像の破壊はンクルマ政権の崩壊を象徴するものであった。銅像の倒壊と手や首の切断という野蛮な行為（ヴァンダリズム）はンクルマ政権の終焉を象徴的に表現するものであり、レーニン像の倒壊と同様に、その破壊はンクルマにその汚名を着せ、あるいはそれらに込められた記憶を抹殺しようとする行為と読みとることができる（飯田，2018）。これに対して、ンクルマはヨーロッパ列強の新聞に掲載された「写真」をとりあげ、政権が終わりを告げたかのように意図的に報道していると帝国主義批判している（Nkrumah, 2011(1968), p. 31）。国歌もクーデタの 1 年後の革命記念日に新しい歌詞に変更された。国家解放評議会（NLC）の軍事政権は 1969 年 9 月まで続いた。10 月にブシヤ政権に民政移管して第 2 共和制が成立した。ブシヤ政権はダンクァ（UGCC）の国民解放運動（NLM）の流れを汲む進歩党（PP）を組織して、反ンクルマ（CPP）の政策を打ち出した。しかしながら、ブシヤの政策は理想主義を掲げたが経済危機を打開することはできなかった。

1972年1月にアチャンポン大佐によるクーデタによってブシア政権が転覆する。しかし、ンクルマは同年4月27日にルーマニアの病院で死去している。アチャンポン大佐は親ンクルマの立場をとり、ンクルマの遺体をギニアのコナクリから生地のンコフル村にもどし再埋葬した(Biney, 2011, p. 183; Fuller, 2014, pp. 168-169)。また、同年、ンクルマ銅像も修復されて議事堂前に建築された(Marais, 1972, 口絵)。さらに、1975年にンクルマの生家が改装されて聖地化されることになった。ンクルマの名誉回復が図られたのである(しかし、これも2007年のGhana@50のときに争点となる)⁴⁾。国家救済評議会(NRC)の軍事政権は1975年10月まで続き、最高軍事評議会(SMC)に再編されて1979年6月まで続いた。しかし軍部では幹部に対する不満が鬱積することになった。待遇と昇進の問題である。

1979年6月に青年将校ローリングス空軍大尉によるクーデタが起り、NRC及びSMCの指導者たちが処刑された。アクフォ将軍が外交に出かけるときローリングス空軍大尉指揮する閲兵式の場面は写真で見るととても印象的である。クーデタは指導者が海外に出て不在の時に起きやすいのは常識である。ローリングス空軍大尉もンクルマのクーデタ計画を踏襲した形である。1979年9月に民政移管しリマン政権が成立する(第3共和制)。

しかし、1981年12月31日にローリングス空軍大尉によるクーデタが再び起きる(筆者が初めてガーナに入国したのはこのクーデタの5日前のことである)。リマン政権が崩壊する。暫定国家防衛評議会(PNDC)は1993年1月まで約12年間続くことになる。1983年頃から、国際通貨基金、世界銀行が勧告する構造調整政策を実施し、西側諸国の援助を受けて経済面で成功をおさめた。ローリングスは「構造調整の優等生」ともよばれた。この時期には頻繁にクーデタ未遂の噂を耳にした。1987年にはブルキナファソのサンカラ大統領の暗殺を悼み、ローリングス空軍大尉はNRCにちなんだサークル名をサンカラの名前を冠したものに改称している(しかし、政権交代後に2005年にアコ・アジェイの名前を冠したものに改称されている)(Gavua, 2015, p. 99)。1989年には、地区レベルでの選挙を実施して議会が設立された。1992年3月には、言論の自由、法による統治、複数政党制を盛りこんだ憲法草案が政府に提出され、4月の国民投票で草案が可決された。1992年5月には、政党活動が10年半ぶりに解禁となり、11月には大統領選挙が実施された。いわゆるアフリカの民主化である。

この前後の出来事で重要なのはローリングス空軍大尉によって1992年7月には共和国32周年記念式典が開催されたことである。また、クワメ・ンクルマ記念公園が創設され、その中心的なシンボルとしてンクルマ銅像が新しく建築された(Milne, 2000(1999), pp. 268-269; Gavua, 2015, p. 102)。さらに、ンクルマの遺骨がンクロフル村から移されて再々埋葬された。ローリングス空軍大尉はンクルマ主義及びパン・アフリカ思想をイデオロギーの根本原理にすえた。

1993年1月に国民民主会議(NDC)という政党を基盤にしてローリングスが大統領

ガーナの独立記念式典

領に就任した（第4共和制）。1996年12月ローリングス大統領は再選され2001年1月まで政権を維持した。ローリングス政権で顕著な出来事は、クマシの科学技術大学の名称がクワメ・ンクルマの名前を冠したクワメ・ンクルマ科学技術大学に戻された。大学の正門入口にンクルマ銅像が建築された。また、1998年にはクリントン米国大統領夫妻が訪問している。これを契機に、アフリカン・アメリカンサミット（1999年）、奴隷交易の拠点ケープコースト、エルミナの観光計画やW・E・B・デュボイスセンターの設置がすすめられた。

2001年1月には新愛国党（NPP）のクフォーがNDCの候補者ジョン・エヴァンズ・アタ・ミルズ（ローリングス政権の副大統領）を破って大統領に就任した。クフォーはブシヤ政権の閣僚だった大臣秘書を経験しており反ンクルマの立場をとるきわめて鮮明な政治を行なった。2004年12月にクフォー大統領は再選し2009年1月まで大統領の任期をつとめている。クフォー政権ではンクルマやダンクァという国民的英雄の二極化であったものを、ビッグ・シックスの他の4人も国民的英雄に祀りあげることで、都市のなかの街路にもこれらの英雄たちのモニュメント（銅像等）が創設され多核化したことがきわめて特徴的である。その周辺には歴史的な英雄たちの銅像も創設された。

2006年1月にクフォー大統領がアフリカ連合（AU）の議長に選ばれた。ンクルマに対する立場も親ンクルマとまではいかなくともパン・アフリカニズムとの関係で対応をせまられたようだ。2006年9月にはンクルマの誕生日を「創始者の日」として国民の日に定めるようにもなった。また、2007年3月にはガーナ独立50周年記念式典を指揮することになったのもクフォーである。式典後すぐに、クフォーは渡英してエリザベス女王に謁見している。ンクルマの紙幣のほかにビッグ・シックスの紙幣も発行された。ンクルマ夫人も国葬にされてンクルマ廟にンクルマと並ぶように埋葬された。この時期、中国の援助により、大統領府、国防省、国際劇場、ホテル等の建築ラッシュが進められた。2008年にはブッシュ元大統領（ジュニア）もガーナを訪問している（後の政権の時にブッシュを顕彰してブッシュ・ウォーカー高速道路が創設された）。

2009年1月にはローリングス大統領時の副大統領であったミルズが大統領に就任した。NDCを政党基盤とする政権に戻った。9月には「頭部のない」ンクルマ銅像とその「頭部」がクワメ・ンクルマ聖廟に設置された。2012年1月にはアフリカ連合の前庭にもンクルマ銅像が建築された。7月にはミルズ大統領は再選される前に逝去しマハマ副大統領が大統領に就任した。オバマ大統領夫妻がケープコーストを訪問した。2012年12月にマハマはNPPのアクフォ＝アドに僅差で大統領選挙に勝利した。大統領選挙をめぐって最高裁で長い係争が続いた。しかし、アクフォ＝アドも2017年1月に大統領に就任し、2017年3月のガーナ独立60周年記念式典を実施している。

注

1) キング牧師はンクルマの招聘をうけて夫人とともに独立式典に出席した。新しい国家の誕生をまのあたりにすることになった。ガンディーの非暴力に由来するンクルマの「積極行動」によって武装蜂起なしに自由が獲得されたことに感銘をうけている。また、ガーナは「私の父の父たちの土地である」と語っている (Lovelance, 2018, pp. 626-628)。2004年1月、キング牧師生誕75周年に、ガーナのテチマンの北西17キロにあるマンソ (旧ボノ・マンソ王国の首邑) にキング牧師の銅像が建てられた (Siverman, 2015, pp. 113, 119)。

2) 名前の順番はガーナの1セディ、10セディ、20セディ紙幣に描かれたものであり、前列の左から右に、ダンクァ、アコ・アジェイ、ウィリアム・オフォリ・アッタ、後列の左から右に、ンクルマ、オベツェビ・ラムプティ、アクフォ・アッドとなっている。2セディ紙幣はンクルマの肖像である。独立60周年にはクエギル・アグレイの記念5セディ紙幣が発行された。

3) アクラ騒擾はアフリカにとっても重要な意味をもっている。ンクルマは「世界中が政治的に沸騰していた時期であった」として、『わが祖国への自伝』のなかで、次のように述べている。

「植民地運動が、中国、ビルマ、インド、セイロン、パレスチナ、インドシナ、インドネシア、フィリピンで成果をあげており、それが西アフリカと、海外にいるアフリカ人学生にも影響をおよぼしていた。アフリカにはまだ政治的な不安がおおびらな徴候はなかったが、植民地のいくつかは地下で沸騰していた。例えば、ゴールドコーストは、当時は、よく待遇され、よく管理されたモデル植民地と考えられていた。この平和な国が、短時間のうちに、アフリカの復活と復興の尖兵になろうとは、世界で誰も予想していなかった」 (エンクルマ, 1960, p. 74)。

4) ンクルマ銅像の受難と救済の歴史については「モニュメント戦争」と名づけたカローラ・レントの論文を参照されたい (Lentz, 2017)。また、ンクルマ未亡人のファセシア・ンクルマが2007年5月にエジプトで亡くなったときにンクルマとともに聖廟に埋葬するかどうか争点となった。

謝 辞

本調査研究は、JSP科研費「アフリカ諸国における独立記念式典の変容過程に関する民族学的研究」(JP17K3279) (研究代表者 阿久津昌三) 及び「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する民族学的研究」(JP15H10910) (研究代表者 吉田憲司国立民族学博物館教授) の助成を受けたものである。

なお、本調査研究は、日本アフリカ学会第56回学術大会 (京都精華大学, 2019年5月18日)、日本文化人類学会第53回研究大会 (東北大学, 2019年6月1日) での発表にもとづくものである。

文 献

- Akyeampong, Emmanuel and Aikins, Ama de-Graft 2008 “Ghana at Fifty: Reflections on Independence and After,” *Transition*(n.s.)98:24-34.
- Anydoho, Nana Akua and Asante, Kofi Takyi 2008 “Trully National ? Social Exclusion and the Ghana@50 Celebrations,” *Ghana Studies* 11:139-173.
- Arden-Clarke, Sir Charles 1958 “Eight Years of Transition in Ghana,” *African Affairs* 57(226), pp.29-37.
- Biney, Ama 2011 *The Political and Social Thought of Kwame Nkrumah*, New York, Palgrave Macmillan.
- キャナダイン, D. 2004 虚飾の帝国—オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ, 平田雅博・細川道久訳, 東京, 日本経済評論社.
- Commander, Michelle D. 2007 “Ghana at Fifty: Moving toward Kwame Nkrumah’s Pan-African Dream,” *American Quarterly* 59(2):421-441.
- Elgenius, Gabriella 2011 *Symbols of Nations and Nationalism: Celebrating Nationhood*, New York: Palgrave Macmillan.
- Fuller, Harcourt 2014 *Building the Ghanaian Nation-State: Kwame Nkrumah’s Symbolic Nationalism*, New York: Palgrave Macmillan.
- Gabriel, Marie-Christin 2016 ““Premier 11 Decembre sans Blaise Compaore”: Burkina Faso’s National-Day Celebration of 2014 between Stability and Change,” *Africa Today* 62(4):23-43.
- Gavua, Kodzo 2015 “Monuments and Negotiations of Power in Ghana,” (in) Derek R. Peterson, Kodzo Gavua and Ciraj Rassol (eds.) *The Politics of Heritage in Africa: Economics, Histories and Infrastructure*, New York: Cambridge University Press, pp.97-132.
- Hess, Janet Berry 2006 *Art and Architecture in Postcolonial Africa*, Jefferson and London: McFarland & Company Inc.
- Holland, Robert et al (eds.) 2013 *The Iconography of Independence ‘Freedoms at Midnight’*, London and New York: Routledge.
- 飯田芳弘 2018 「レーニンの首」をめぐる記憶と忘却 (上・下), UP (東京大学出版会) 549:5-12, 550:20-28.
- イシグロ, カズオ 1993 日の名残り, 土屋政雄訳, 東京, 岩波書店.
- Kellner, Douglas 1987 *Nkrumah*, New York: Chelsea House Publishers.
- キング, M. L. 2003 私には夢がある M.L.キング説教・講演集, 梶原寿賢訳, 東京, 新教出版社.
- Lentz, Carola 2013a “Celebrating Independence Jubilees and the Millenium: National Days in Africa,” *Nations and Nationalism* 19(2):208-216.

- Lentz,Carola 2013b “The 2010 Independence Jubilees:The Politics and Aesthetics of National Commemoration in Africa,” *Nations and Nationalism* 19(2):217-237.
- Lentz,Carola 2013c “Ghana@50 Celebrating the Nation Debating the Nation,” *Cahiers d’Etudes Africaines* 53(3)(211):519-546.
- Lentz,Carola 2017 “Ghanaian “Monuments Wars”:The Contested History of the Nkrumah Statues,” *Cahiers d’Etudes Africaines* 57(3)(227):551-582.
- Lentz,Carola and Budniok,Jan 2007 “Ghana@50-Celebrating the Nation:An Account from Accra,” *Afrika Spectrum*(Deutches Institut fur Afrika-Forschung) 42(3):531-541.
- Lentz,Carola(ed.) 2011 Celebrating Africa@50 The Independence Jubilees in Madagascar,the DR Congo,Benin,Mali and Nigeria, *Working Papers of the Department of Anthropology and African Studies*,Johannes Gutenberg Universität.
- Lovelace,H.Timothy,Jr. 2018 “Martin,Ghana,and Global Legal Studies,” *Indiana Journal of Global Legal Studies* 25(2):623-637.
- Marais,Genovera 1972 *Kwame Nkrumah:As I Knew Him*,Chichester:Janay Publish Company.
- McCrone,David and McPherson,Gayle(eds.) 2009 *National Days:Constructing and Mobilising National Identity*,New York:Palgrave Macmillan.
- Meredith,Martin 2005 *The State of Africa:A History of Fifty Years of Independence*, Johannesburg:Jonathan Ball Publishers.
- Milne,June 2000(1999) *Kwame Nkrumah:A Biography*,London,Panaf Books.
- モリス, ジャン 2010 帝国の落日 パックス・ブリタニカ完結篇 (下巻), 池央耿・棕田直子訳, 講談社。
- ニクソン, リチャード 1986 指導者とは, 徳岡孝夫訳, 東京, 文藝春秋。
- エンクルマ, クワメ 1960 わが祖国への自伝, 野間寛二郎訳, 東京, 理論社。
- Nkrumah,Kwame 1962 *Towards Colonial Freedom:Africa in the Struggle against World Imperialism*,London:The African Publication Society.
- Nkrumah,Kwame 2001(1968) *Dark Days in Ghana*,London:Panaf Books.
- ノラ, ピエール 2002 記憶と歴史のはざまに, ピエール・ノラ編, 対立 (記憶の場—フランス国民意識の文化=歴史 第1巻), 谷川稔監訳, 岩波書店, pp.29-56。
- Silverman,Raymond 2015 “Of Chiefs,Tourists,and Culture:Heritage Production in Contemporary Ghana,” (in)Derek R.Peterson,Kodzo Gavua and Ciraj Rassol(eds.) *The Politics of Heritage in Africa:Economics,Histories and Infrastructure*,New York:Cambridge University Press,pp.113-132.
- Zerebavel,Eviatar 2003 “Calendar and History,”(in) Jeffrey K.Olick(ed.) *States of Memory*,Durham:Duke University Press,pp.315-337.

(2019年 9月19日 受付)
(2019年 2月21日 受理)